

新資料紹介・森万紀子―山崎柳子宛の手紙

杉山若菜

一、小説家・森万紀子

一九六五（昭和四〇）年、森万紀子は短編小説「単独者」で『文学界』新人賞佳作に入選し、創作活動に専念。デビューから一九九二（平成四）年鬼籍に入るまでの二十七年間、遅筆で寡作でもあった彼女の作品総数は単行本にして僅か九冊。森の死後三二年を経た現在では全作が絶版となり、古本でさえ数冊を除き入手が窮めて困難な状況にある。

生前そして没後と知名度が高いとは言えぬ森の来歴を振り返る時、人々の耳目を引く文学賞受賞の好機に恵まれなかったことは一つの不運であった。事実、「単独者」を含む初期作品群中、四作品（「単独者」「距離」「密約」「黄色い娼婦」）¹が各々芥川賞候補作として選出されながら、毎回審査委員の評価が是非に二分するため過半数に至らず受賞を逃した。例

えば『文学界』新人賞選考の際「単独者」を熱心に推薦した選考委員大岡昇平は、「この作者は自我と環境について、或るきまった視点を持つている」「一種のオリジナルなものが感じられた」と評価し、他の賛同を得られなかったのは「男性にとつて少しやるせない性質」の、いわば「可愛げ」のない作風であったからか、と推測した。また、「密約」（『文芸』一九六九・八）での芥川賞候補時、選考委員三島由紀夫は「沈痛なムードが周到に用意され」「無気力な無気味なブリーダーの群」の描写と小説的結末の起爆力を高く評価したものの、反して、同委員丹羽文雄は「女主人公の思考が水の中の油のように観念的」で、「深刻ぶるから不消化になる。小説はただの一行で駄目になることもある。」と否定的評価をくだした。

新人賞佳作を除き、森が文学賞受賞の誉を得た唯一は、デビューから一五年を経た一九八〇（昭和五五）年の書き下ろ

し長編『雪女』（一九八〇・四・新潮社）に与えられた泉鏡花賞（第八回）であった。幻想的な小説に冠する当賞によって、「観念的」と揶揄され続けた森の作品評価に一縷の光が射した。だが、『雪女』発表からその後亡くなるまでの二二年間に森が発表した単行本は、短編集『聲音』³、書き下ろし長編『囚われ』³と『悪運』⁴の計三冊、他、単行本化されなかった短編六作やエッセイ等、ともに耳目を引く評価を得ることはなかった。厭人癖とも秘密主義とも称された森は、晩年埼玉県三郷の団地に一人住まいをしていたが、親族や一部の編集者を除き交流する人は少なかった。長編『悪運』が出来上がった一九九二（平成四）年一月、自宅で本に埋もれるようにして亡くなっているところを発見された。検視の結果、死因は「心不全」であった。

二、手紙の経緯―四人の会

現在森万紀子を知る上で最も優れた資料は、高橋光子の『「雪女」伝説―謎の作家・森万紀子』（一九九五・一〇・潮出版）である。高橋は、森が「単独者」で佳作受賞した際の『文学界』第二〇回新人賞受賞者だった。

高橋の受賞作「蝶の季節」は、団地住まいの主婦が次々に蝶になる事件を発端にして、鬱屈を抱えた「私」もついに蝶に変身するまでの経緯を描く。だがこの幻想譚はその終盤、

「私」が精神失調による妄想世界の住人であったことが明かされて、作品世界全体に深い影を投げかけている。

一方、森の「単独者」は、精神病院に二年間強制入院していた女の、退院後の日常生活が描かれている。この特異な作品設定について、後に精神医学の観点から高橋正雄は、

昭和40年の時点で精神科病院から退院後の患者心理を描いているという点で、精神医学史的にも貴重な作品である。昭和期までの精神科病院を描いた作品といえば、入院患者か入院生活を描いたものが大部分で、退院後の患者を描いた作品としては昭和63年に発表された色川武大の『狂人日記』がある程度だが、『単独者』は、それに⁵20年以上先駆して退院後の患者の姿を描いているのである。⁶

と評している。

はからずも同時期、精神不調の病を通じて自己と外部世界との齟齬を焦点化した森と高橋両者は年齢も近いことから、一九六七（昭和四二）年七月『文学界』編集部が催した新人作家の懇親会席上で初めて顔合わせをし、言葉を交わすようになる。

その後、同会に出席の山崎柳子⁶、山崎に誘われた丸川賀世子⁷も加わり、新人女性作家四人の交遊が始まる。親交は、各々の家に集まっていたの雑談や、近隣への散策・ピクニックと、およそ三年間続く。同人誌にて既に長い文筆歴を持つ山

崎と、最年少で時々挑発的な言葉を発した森との間には、創作方法や文学観を巡って火花の散る瞬間もあったようだ。

だが、この四人の関係も、森の第一短編集『密約』（一九七〇・一・新潮社）の出版を丸川宅で祝って以降、途絶えてしまう。創作に専念する故懇意につきあえぬ、といった主旨の、気負った森の手紙が契機となったようだ。

本稿で提示する森の手紙は、いずれも山崎柳子宛のものだ。後年尼僧となった山崎の亡き後、彼女の遺品として書簡を委譲された高橋は、『女性作家シリーズ16』（一九九八・一〇・角川書店）にて森の年譜・解説を執筆するために話を伺いに行った筆者に、後日委譲してくれた。

官製葉書・絵はがき・封書入り手紙・封書なしの手紙、どれもが森の自筆によるもので、概ね左記の如く分類できる。

・総数七三通

・葉書一八通【・日付あり一五通・日付不明三通】

・封書五五通【・日付あり一五通・日付不明四〇通】

・時期一九六七（昭和四二）年五月五日〜一九七〇（昭和四五）年四月一七日

山崎が封書や葉書の切手付近を切除しており、多くのものが消印を確認できず、また、森が手紙文面に日付を記した事例が少ないため、約六割が日付不明となっている。しかし辛うじて判読可能な消印から投函時期を確認し、また日付不明のものも、文面内容から執筆時期がおおよそ推測可能となっ

た。

文面内容は、四人での「ピクニック」やお宅訪問を楽しみにしている様子、森が飼っている小鳥の様子等、私的な事柄や、執筆が進まぬ様子、文芸雑誌掲載不採用になったことへの弱音や愚痴。時に山崎の森作品批判に対して負けん気を露わにした応答と、それに対する反省や弁解。そして山崎作品への羨望と賛辞、微笑ましい励ましとが、判読が容易ではない強い癖字で綴られている。

本稿は、まず森の出発点となった「単独者」のあらすじを紹介する。次に、山崎の言に反論するかのようにして「単独者」や創作に関する意見を記した森の手紙文を新資料として提示する。当手紙は日付不明ではあるが、文中に「単独者」発表から三年が経過したと記されている。その他書き込まれている内容や、「聖者たち」（『文学界』一九六七・六）の自評等を鑑みると、およそ一九六八（昭和四三）年一〇月前後の頃と推測される。合計五枚の便箋に書かれた文面をそのまま画像として提示するとともに、甚だ判読困難な字体ではあるが、筆者が活字に起こしたものを付記する。（誤字・脱字はそのままとし、判読できない字には□を付した。）

三、「単独者」の世界について

「二年間の精神病強制治療生活が完了し」、身寄りもなく、

短期パート仕事を渡り歩き生計を立てている「三十近い」女「直子」は、代々木、新宿、甲州街道、いくつもの路地を通り抜けながら「或る世界を通り過ぎた疲れ」とともに帰宅する。ドアを開けると彼女の部屋に足繁く通う「史郎」の「見あきた」靴が置かれていた。彼は以前彼女が入院していた精神病院の医局医で、「でつぶりと太り、油ぎった、いかにも女を好きそうな匂いを身に漂わせている」「四十過ぎ」の妻子持ちの男である。「直子」の退院日以来首尾一貫して、面倒見のいい医師であり、献身的な愛人という役割に満足している。「とにかく僕が何とかする。根性を叩き直すよ。少なくとも元の君に戻すさ」「僕の愛で君を立ち直らせたんだ」と囁き翻訳の仕事を促すなど世話を焼こうとする。そのような「史郎」を目の前にして、「直子」の不快感はついぞ晴れることがない。けれどもその不快感を自ら宥め賺すかのよう——「だが、そのうち慣れるだろう。慣れきってしまったえばいいのだ」「結局、そんな事は自分にとつて、どうでもいい事のような気がしてならない」と心の内で呟き、「部屋一杯に拡がり、重くのしかかってくる」ような「史郎」の不機嫌さを取りなすために自身の肉体を開き預ける。それは、「史郎」の口を塞ぎ、「慣れきった快感」と「いつもの虚脱感」とを満喫するための、「直子」の日常的な習慣となっている。

「直子」のもとに現れるもう一人の男「正」は、「直子」と同じ精神病院に入院していた過去を持つ。「正」は、「世間

体」の名のもとに「人並み以上」になることを囑望しつつ、その幻像かなわぬ自身の現実が悪態をつきながら生きていく。殺人罪という前科と、精神病を患ったという病歴とによって、輝かしい未来への扉が閉ざされたと感じているためだ。「正」の「穴の中」に渦巻くあてどない呪詛は、同じ入院歴を持つ「直子」との偶然の再会によって、徐々に声となって流れ出していく。「大勢の人は皆、まともに軌道を歩むさ、俺達は脱線だ。あがいても、わめいても本道には帰れやしないんだぜ。一生日陰者だ」と毒づく「正」の煩悶を前にして、「直子」は「人間の軌道とは、本道とは、人間が生れてやがて死ぬと云う事実だけだ」「その過程で人がどんなに、あせろうが、わめこうが、それが何だろう。大した問題ではないのだ。」とやり過ごす。そうして「正」は生きる上で最後の砦であった性交による快楽への夢想が、「直子」との初体験によって見当違いであったことを知り、また自分を庇護する母の病再発にも直面し、この世への未練を捨てて。「正」は「直子」の部屋を出て五時間もの間逡巡した後、線路に飛び込み自殺をする。翌日「正」の自殺の報に少し心が揺れたものの、「暗がりの中にぼつんと立って」いる落葉した木を眺めながら、「ふと直子は人生の退屈さを感じ」るのである。

す。

新人賞に落ち、候補に落ちてるのですからね、少しも陽の当たった作品ではありません。

又（光栄が）虚名であると思えと云う事にも、少し困惑を感じております。

私は選んでもらった編集部に対して、又各批評の先生達に対して、心より感謝こそすれ、先方達の私への評価は虚名であつたと云う侮辱的な事はとても思えません。

次になぜ、「単独者」への光栄が（本当にそんな素晴らしい事があつたとすればですが）虚名でないか書いてみます。

まず、第一に、私の文学脈脈の上で完成した作品だからです。「聖者たち」は「単独者」を原点とし発展させた作品に外なりません。よく読んで頂ければわかると存じますが、「単独者」の応用編二人を登場させ、その二人を通じ社会における真の人間連帯の存在の型を探った作品だからです。

単独者の変型による型で、人間社会における（絶対）連帯が、可能な状態をつきつめた作品です。だがこの作品は、対称となる普通人の人間連帯の破たん欠けていて失敗しています。

いずれ単行本になる時（いつかは知りませんが）書きなおすように云われている作品です。

又「単独者」は私の文学の原点です。これからも単独者に始まり単独者より出発します。なぜ原点かと申しますと、現代社

会におけるキリストを感じるからです。このキリストは始終、私の躰の中にいます。私は身の罪に立ちはだかります。生きている間中対決して行かねばならないと思うからです。

このキリスト者と思う私の単独者に皆さんが光栄を浴びせて下さったのならとても嬉しく、二、三日中に図書館に行き、読み返し、次作の養分に致します。

以上の、根本的なくいちがいから、厚い友情も少し、理解出来ず、困っております。と云うよりも、私は原点から離れる必要も感じませんし、陽が当り過ぎて、忘れかねているとか、過去の作品はプラスにならない etc. と云う事とは最初っから時点が違います。

それから又、なぜ「単独者」は森万紀子自身でなく、「聖者達」は少し森万紀子の顔があり、そして「回転」は森万紀子でなければならぬのか理解に苦しみます。

私は、作品に「その作家の性格が出ているから」「その作家の考えが出ているから」「あの作家自身だ」 etc. と云う風な作家と作品の関係には少しも意義を見出しません。

そのような型で、作品の中に「自己表出」する「方法」を私は純文学とは思っておりません。

私の純文学感、現状を踏台にして新たに宇宙を創造する、その中に抽象化した自分を埋入れる事であり、独自の「私」その他の世界を造り出して始めて、他者に働きかける事が可

態と思っています。

もちろん、100人の作家が居れば100の純文学感があるわけで、それはそれでいいわけです。これは1/100の、私の純文学感ですから。

また山崎さんの御手紙は私への自戒とも見受けられます。しかし、それ程私はウノボレてはいません。

又賢めて□過ぎ□かく□□み返されたという話。賞を与へるのが早すぎたと云う話し、批評家の深読みで、自分の鋳脈をアヤマったetc.、の話しをよく耳にします。

私は、これらの言葉のどれをも信じてはおりません。自分の責任を転嫁する甘ったれの弱虫と感じております。

□□□□事で押し潰される人達でしたら、例え育つても何程の事があらん、潰されるのは、潰されるだけの弱い文学の芽しか生まれながらに持つてないと思うからです。

確な文学の芽を持つ者は、外でどんな風が吹こうが、一時はその風に向を見失つても、必ず自分の鋳脈を掘り出します。そうして始めて作家と云えるわけです。

とにかく、私は春からくたびれてしまい、あんまり見込みありませんから、山崎さん高橋さん丸川さん、頑張つて下さいませ。

全く、しんどいですね。

私は十一月中旬より例年により「冬眠」に入ります。子供の頃からの小児リウマチが、この年になつても出てくるからで

す。

どうぞ御3人で楽しくお過ごし下さいませ。

又、新聞雑誌からも完全に離れますので、皆さんの作品掲載になつても、わからず仕まいと存じます。お祝の御手紙は無理と存じますので、悪しからず御□□下さいませ。

では、御健康御健筆、心より御祈り申し上げます。当分の間失礼させて頂きますが、皆様にくれぐれもよろしくお伝え下さいませ。

ではごきげんよろしゅう。

山崎様

森万紀子

* (筆者―追伸としてか別紙あり)

私には山崎さんの文学観が、少し意外でした。

又、過去の光栄ある作品から今だに、3年もたつているのに、離れられない人が、實際いる事のがどうか、ちよつと考えられません。

私は、どうして、思い出そうかと、困っております。

又「単独者」くくと申しますが、覚えている人は何人おりますか。すべて、これ死んだ子供の年を数える事に等しいと存じます。又「蝶の季節」が「単独者」より下だとは私は考えておりません。私にはない、空間があり羨やましく存じます。

以上です。

では、

六、「あとがき」

総じて森の作品世界や手紙には、埴谷雄高や野間宏作品の愛読者ならではの、「穴の中」「本来の場所」「宇宙」「極地」「真空地帯」「単独者」といった言葉が、時に文脈を壊してまで頻出する。だが、そこに描かれた観念とは裏腹に、森の中には、ある瑞々しくも柔らかな言葉によって、自身の拠って立つ場が描かれることもあった。第一創作集『密約』（一九七〇・一・新潮社）の末頁に記された「あとがき」の一部である。

子供の頃、「陣取り」と云うのがあった。地面に皆で出来るだけ大きな円を描く。

ジャンケンで勝つと片足でピョンピョン跳ねて行き、その円の中に投げた石の所から自分の陣地を手のひら一杯描いて来る。

人の陣地を踏んでも、人の陣地と重なってもいけない。その代り描いた自分の陣地に入れば、人から踏まれもしないし、重ねられもしない。

そうして円の中に自分だけの陣地を殖やして行く。今まで作品を書く時、陣取りのように全体と云う円の上に、自分の空間を構築してみたいと云う願いが強かった。

廻り続けるコマの運動の中に激しく廻るその極限において「静止」の世界が存在するように、流動する全体の中にも、流動する状態そのものの中に「静止」の世界があり、その地点に立った時、空間の構築が出来そうな気がしたのである。

五編の作品は全体の中に立つ私の地点と、その地点から全体の上に描いた私の『心の陣地』である。

「人から踏まれ」ることのない「自分の陣地」を作るために、「片足で」「跳ねて行き」投げた石を起点に「手のひら一杯」に描いた「円」。作品中の「穴の中」「殻の中」「本来の場所」と通底するこの「円」という空間自体が、森の作品世界の、また、作品世界を生きる女性人物の内なる世界の比喩でもあった。比喩はそのままに森の生の比喩でもあろう。

「自分の空間」と指さすどこかを求めて絶えず歩き続ける、痛いほどの渴望の先に、彼女は、彼女たちは、何を見たのだろうか。喧騒たる日常世界が、茫漠として揺るぎない自分の思念の世界（「静止の世界」）へと変容する一瞬間を夢見た森。この「あとがき」執筆は、ちょうど高橋・山崎・丸川達との「四人の会」が維持されていた最終時期に相当し、彼女の全文章中、最も幸福そうな表情を湛えたものとしてある。

「純文学」という言葉が未だ生きていた一九七〇年前後という時代、「私自身が生きるため」創作活動を開始した森

は、以降、ひたすら自分の「穴」を掘り続けていく。渡辺恒夫は森作品を一級の幻想文学だと評価し、真の幻想文学を次のように定義する。「日常的自己とは異なるもう一つの自己、より真なる自己を映し出す鏡を創造することによって、この世界をそのまま異世界へと変容させる」力を持つものであると。自分「本来の場所」と言分けられた異世界は、他者非在を生きる彼女たちのありようと深くつながって、その後森作品に色濃く投影され繰り返し登場することとなる。ことに「黄色い娼婦」「雪女」以降、森作品の住人は、誰をも視野に入れぬモノローグの語り部となる。それは晩年の彼女の精神失調を踏まえると、森万紀子という作家の、危うい「陣取り」であったのかもしれない。

本稿は、「内向の世代」と称された作家森万紀子の新資料として、一九六八（昭和四三）年執筆の手紙を紹介した。今後、その他の手紙並びに個々の森作品について考察し、一九七〇年前後に湧出した「内向の世代」とは何であったのか、あらためて別稿にて論ずる予定である。

注

(1) 森が芥川賞候補となった作品と時期は以下の通り。

「単独者」(『文学界』一九六五・五)は昭和四〇年上半期候補作。
「距離」(『文学界』一九六五・一〇)は同年下半期候補作。

「密約」(『文芸』一九六九・八)は昭和四四年下半期候補作。
「黄色い娼婦」(『文学界』一九七一・六)は昭和四六年上半期候補作。

昭和四六年上半期は受賞者なしとなったが、舟橋聖一が森作品を積極的に推している。一方、当回をもって石川達三は選考委員を辞退することになる。「内向の世代」作品の、「小説がノイローゼによって書かれるような傾向」に対する批判的意思の表明でもあった。

(2) 『寢音』(一九八八・二・福武書店)

(3) 『囚われ』(一九八九・二・文芸春秋社)

(4) 『悪運』(一九九二・一一・近代文芸社)

(5) 高橋正雄「精神医学的にみた近代日本文学(補遺27)——中野重治・伊藤整・中村光夫・森万紀子・加藤周」(『聖マリアンナ医学研究誌 醫學研究業報』二〇二三年Vol.23・P.51・聖マリアンナ医療・薬学・健康研究所)

(6) 山崎は「眼なき魚」(『文学者』一九六六・二)にて昭和四一年芥川賞上半期候補に、次いで「記憶」(『文学界』一九六六・一〇)にて同年芥川賞下半期候補に、「針魚」(『文学者』一九六八・八)は昭和四三年芥川賞下半期候補にあがっているが、惜しくも受賞出来なかった。

(7) 丸川は「巷のあんばい」(『婦人公論』一九六三・一一)にて昭和三八年第六回女流新人賞を受賞している。

(8) この「あとがき」には一九六九(昭和四四)年一二月の日付が入っている。それから一年後、川村二郎は「内部の季節の豊穡」(『文芸』一九七〇・一二)に、「最近の注目すべき新入たちの作品」として黒井千次や後藤明生らの名とともに、

森万紀子の「密約」をあげている。川村は、「内面への道」とでも呼ぶべき行程」は「見るべきものを最も純粹な形で見るため」の努力であるとして、これら新人作家たちの作品を評価した。いわば、昭和四〇年代の芥川賞候補の常連であった新人たちは、その翌年、小田切秀雄によって批判的に命名された「脱イデオロギーの内向的な文学世代」、つまり「内向の世代」として広く注目をあびることになる。

(9) 渡辺恒夫「異世界について―幻想文学論」『トランス・ジェンダーの文化―異世界へ越境する知』(一九八九・五・勁草書房)。

渡辺は、森作中「残骸の街」(『文学界』一九七〇・三)を最も評価し、逆に泉鏡花賞を受賞した『雪女』を「いつもの持ち味の殺された失敗作」とする。

(10) (9)の著者渡辺は心理学者の視点から、森について、「病蹟学者ならばこの作家を『離人症』と、それどころか『分裂病』とさえ、診断するかもしれ」ないとし、作品主人公たちは「他人ロボット化症候群」とも言うべき「他人の非存在を生きるはめになるという状態」であることを指摘する。